

## 紀州藩藩札史料拾遺

藤田 貞一郎

- 一、はしがき
- 二、元 祿 札
- 三、享 保 札
- 四、文政の松坂札
- 五、むすび

### 一、はしがき

藩札についての研究は、飯淵敬太郎『日本信用体系前史』（学生書房・一九四八年）、作道洋太郎『日本貨幣金融史の研究』（未来社・一九六一年）、川上雅

『藩札論』（『近世史研究』三七号所収、一九六三年）を研究史上の里程表として、今日もなお幾人かの研究者によって孜々として研究が積み重ねられている。その点は、日本経済史研究所が編集する各年版の『経済史文献解題』の第三部日本経済史の一六貨幣の部に収載された著書、論文から明らかである。

川上雅はそれまでの藩札学説史を要約して、(i)経世家的藩札論、(ii)藩札と信用通貨論、(iii)藩札と国家紙幣論の三つに区分し、自らの解釈としては「藩札は、手形ではなく、紙幣である。支払を約束する証書でなく、また、それ自体無価値であるから、領主の権力に

よって経済外的に通用が強制されて、はじめて流通性を獲得することができる」とする（児玉幸多・豊田武編『流通史Ⅰ』山川出版社・一九六九年・三一三頁）。

その後も、新保博「藩札についての一考察——徳川時代の信用制度との関連において——」（神戸大学『経済学研究』年報一九所収、一九七二年）、田谷博吉「藩札——江戸時代の紙幣——」（『阪南論集（社会科学編）』一七巻四号所収、一九八二年）、作道洋太郎「近世経済発展と藩札の発行——田谷博吉氏の見解に對する私見——」（『社会経済史学』四八巻二号所収、一九八二年）が発表され、藩札についての理論的研究が、厳しい論争のなかに深められつつある。

そうした研究状況のなかに「紀州藩藩札史料拾遺」と題した史料紹介を筆者が試みるのは、右のような論争にたわりたいというような大志を抱いてのことでは毛頭ない。ただ、論争の当事者である田谷、作道両氏とも、実際の藩札史料を通して藩札の具体的な流通構造を調べてみるという基礎作業こそが、今後に

おける藩札史研究の最大の課題であると発言していることに勇気付けられたことと、紀州藩政史を叙述するに当っては、それがたとえ一般向けの通史に類するものであっても、藩札に関する記述を欠いては体を成さないと考えるからである。

さて、これまで、紀州藩の藩札に関する史料を掲載したものとしては、管見するところ『和歌山縣誌 上巻』（和歌山縣・一九一四年）、『南紀徳川史』第四冊、第十二冊（南紀徳川史刊行会・一九三二年）、『和歌山市史 第五巻 近世史料Ⅰ』（和歌山市・一九七五年）があり、紀州藩札に関する論稿としては、浜村正三郎「紀州藩の領内五ヶ国通用札について」（『経済史研究』一七巻一号所収、一九三七年）がある。が未だ、史料蒐集が十分に行なわれているとはいえない。そこで『田辺町大帳』と三井文庫所蔵史料のなから、紀州藩札に関するものを選び出し、以下に紹介して置きたい。

その前に、史料の意味を理解する便宜を考えて、今

日まで判明している事実につき、若干ことばをそえておくことにする。

紀州藩の藩札発行の歴史については、『和歌山縣誌 上巻』の「延宝六年始めて銀札を発行せしも行れず、月餘にして廃止す。其高を詳にせず」(八四二頁)という記述があるが、元禄一五年(一七〇二)正月発行の元禄札が史料の点でも十分に確認できる最初のものである。この元禄札は宝永四年(一七〇七)に通用停止となる。次いで、享保一五年(一七三〇)から同一八年にかけて、銀札が発行された。が、この銀札も日ならずして通用停止となり、その後は久しく正金銀通用の時期が続く。しかし、文政五年(一八二二)には松坂札(勢州札ともいう)の発行、天保六年(一八三五)には若山札の発行をみることとなり、以後、明治維新期まで藩札が数多く発行され領内を流通することとなる。幕末期には藩札が流通必要量以上に発行されたため、藩札の価値が下落した。この結果、これを是正せんとして、藩当局は、正金銀をもって過

剩発行分を回収しようとしたことがあった。『銀札融通引替方一件』(『和歌山県史 近世史料五』、一九八四年所載)によると、文久二年(一八六二)藩当局は銀札と引替のための正金銀を六郡の百姓から調達しようとしたことと、日高郡では「身分柄相応」のものが、それに応じたことがわかる。表題では「銀札為融通引替」、或いは戌六月の有田郡大庄屋共の「口上」では「銀札御融通正金銀を以銀札ニ引替相納候」などとの表現が見受けられるが、藩当局のねらいはまさに「銀札御剪棄」にあった。これに関連して、『南紀徳川史第十二冊』所収の御勘定見習御勝手方助兼勤森部市之丞による一連の建議は、必読の参考史料である。この一連の建議から、文久二年の措置は市之丞の意見 became かなり正確に取り入れたものであることを理解し得る。この建議には在中へ引受けさせる構想が明確に述べられている(二三八頁)。したがって、市之丞の意見は「遂に採用に至らざりしと云」とする、同書二四二頁における編者の注記は再検討の余地があるやに思われる。

## 二、元 祿 札

本節の史料は、いずれも『田辺町大帳』からのものである。『田辺町大帳』についてはその目次集を、一九八一年に田辺市教育委員会が編集発行している。

すでに拙稿「紀州田辺領の経済政策——その本藩に対する独自性——」(『同志社商学』三五巻四号・一九八三年)で説明したように、田辺領は本藩に対して一定の独自性を保有していたと考えられるので、本節の史料はその点を念頭にして解釈することが必要であることをあらかじめ指摘しておく。

宝永三年(田辺町大帳五)

一同(十月……藤田) 札御役人金谷七郎左衛門殿

同日附喜多野左右衛門殿被参候、先ノ役人川口

吉兵衛殿百武条右衛門殿上リ被申候由

一十月十七日札改役人之由川村清五郎今木林藏勢

州通灘役所ヲ廻リ、当地札役所迄被参、下長町

惣四郎所ニ泊リ、翌日札場ニ一日居被申候而、同十九日立被申候、爰元ニ而も何改も無之候、役所ヲ見分之様ニ相見ヘ申候

……(中略)……

一同(十一月……藤田) 廿五日玉置九左衛門殿被仰付候ハ兼々申付候通札通用猥ニ無之様ニ町江川諸商人江其外弥堅可申付由被仰、丁々申渡ス一同廿九日玉置九左衛門殿被仰渡候者、御屋敷申来候ハ札改役人熊野へ通り申候由、夫ニ付兼々念入可申付候ヘ共、札通用猥ニ無之様ニ、錢遣拾五文、上ハ堅遣申間敷候、肴等買申とて、錢ニ而買不申様ニ(傍点は引用者、以下同様)魚屋町問屋等諸商人ニ可申付由ニ候間、弥堅可申附由、丁々ヘ申渡ス

田辺領内での銀札役所は本町の源十郎の家に設けられてい、札役所詰の役人もいたが、札改めの役人が時に現地見分に訪れることがあったと思われる。札遣いの趣旨は徹底しなかつたらしく、「札通用猥ニ無之様ニ、

錢遣拾五文<sup>上</sup>ハ堅遣申間敷候、肴等買申とても錢ニ而買不申様」と、元禄札発行後四年を経たにもかかわらず、指示しなければならなかった。

宝永四年 (田辺町大帳五)

一 二月和歌山<sup>参</sup>候書付ニ札遣之義未しまらざる儀、共有之ニ付、町在共段々相改候、此度田辺町在ニも改役人差遣し右町在之者共札役所ニ呼出シ改之品可申聞候間、其旨可被申通候、此度右役人ハ佐渡清左衛門差遣し申候

…………… (中略) ……………

一 清左衛門殿被申候ハ、札遣之儀先年一通リ被仰出候得共しまらざる所有之間、此度罷越候、諸商人船持共船頭ニ申渡品有之間、其旨被申聞候ハ人別ニ申聞セ、札遣之儀自今式法ヲ立申事ニ候、商賈之儀候得ハ指つかへ申儀なと有之候ハ、其段沢ケ立願申候ハ、兎も角も当所勝手宜様ニ了簡之上可申付候間、急度被仰付品ニ而ハ無之候とも申候故、此方<sup>ル</sup>申候ハ、人別ニ被仰

聞候儀御苦勞ニ可被思召候間、私共承候而申事ニ候ハ、左様被成候而如何可有御座と申候ハ、其段尤ニ候、乍去上ロニ而も其通申通候ハ共、商之儀者人々以為違も有之、其上下々江申次候而口上之違も出来候得ハ、御用難弁候間、人別ニ違候而可申聞候間、弥其通申付給候様ニと被申候

一 清左衛門被申候ハ、当地なと往来之所なれハ、一夜泊リ候旅人ニハ、錢取ヤリハ可仕筈ニ候ヘ共、取ため候而ハ旅人ニ置ニ候ヘハ錢通用候様ニ候間、錢ヲ取候ハ、札役所江持参致筈ニ候、乍去役所ニハ取込ニ候ヘハ錢屋ヲ当町ニ而一軒被仰付可然候、此段ハ一通之儀ニ候間、相談之上<sup>迄</sup>旅籠屋へも被申聞可給と被申、且又二宿と泊リ候ハ、札遣之儀申聞札遣ニ為致可申候と被申候故、其段者兼而其通ニ候、一宿之旅人ハ錢取遣リハ仕儀ニ御座候と申達候

右之段玉置九左衛門殿へ三人罷出申達候、清左

衛門殿方を被出候由ニ而書付一通九左衛門殿方御出左之通

一他国江売遣候諸色代金銀来次第銀札買可申候、其金銀又他国へ用ニ遣候儀難成候、入用候ハ、札場ニ而替他国用ニ遣シ可申候

一他国者何ニ而も当地へ売買ニ参候ハ、其品相断可申候

一往来之旅人を受取之金銀錢共早速其品相断銀札ニ替可申候

一他国船出入相断可申候

一当浦之船他国へ参候儀者不申及ニ御領内何方へ参候共其品具ニ相断船出入可仕候

一他国江何ニ而も売ニ遣し候ハ、色物并員數書付ヲ以具ニ相改可申候

一錢売買之儀ハ、札場之外ニ而不仕筈ニ有之候、若心得違之者有之候ハ、自今慎可申候

但、和歌山とハ違兩替屋と申もの急度無之ニ付、外ニ而札通用紛敷有之候

右御触相届次第役所へ相改可申候、当人罷出候節、可申聞候、以上

亥二月晦日

………(前略)………

三月朔日右之書付(町廻船之寛のこと、船數合拾一艘……藤田)札役所江持参候而清左衛門殿へ相渡申候、船頭ニ御逢候而被仰聞候ハ町年寄同道為致可申哉と申候へハ、銘々参候ニも不及候間、船頭之内以書付申聞得心致者貳三人指越可申候、外之者へハ其者共申聞候様ニ可致と被申候故、商人中江も其通老丁之内一兩人宛出可申と被申候、且又錢屋之事ニ付此方ハ申違候ハ此辺ハ西国順札之往還殊ニ熊野山下リ之所故大勢通り申事ニ候間、大通之節ハ錢屋者人ニ被仰付候而ハ手つかへ申事も可有之候へハ、此段ハ御願申上度と町年寄共申事ニ候、是ハ先内證物語町御奉行所ニも未申上候、如何思召候哉と申候へハ尤之事ニ候、乍去狼ニ成候而ハしまり不申候、丁々ニ錢屋ヲ拵候

ハ、手支申事も無之間相談之上何軒ニ而も可仕と  
被申候事

元禄札は、元禄一五年に発行をみたが、なかなか「札遣」の趣旨が徹底しなかったようである。そのためその趣旨を行届かせるべく、田辺領には和歌山から札役人として佐渡清左衛門が派遣されて来た。「札遣之儀自今式法ヲ立申事ニ候」といつていることから、それ以前すでに「錢遣拾五文上ハ堅遣申間敷候」といった条項などを有する「一通り」の藩札通用規定があるにはあつたが、未だ整備されたものではなかつたと思われる。もっとも、これ迄、この元禄札の通用規定の現物は未だ発見されていないので——『和歌山市史』二四六頁に収載の「覚」も、整備された通用規定とはいいがたい——、これ以上の言及は差し控えねばなるまい。ただ、不十分なものであつたらしいことは、佐渡清左衛門がこの年、宝永四年にあらためて「式法」を示していることからして、間違いないところであらう。ただ、その際、清左衛門が「当所勝手

宜様ニ了簡之上可申付候間、急度被仰付品ニ而ハ無之候とも申候」といつていることから、少なくとも元禄札の取扱いについて本藩たる紀州藩が田辺領の独自性を容認する態度をとっていることを見逃さないようにしたい。

それはともかく、このような通用徹底のための努力も空しく、宝永四年の末、元禄札は通用停止となつた。

### 三、享保札

次に、享保札関係の史料を紹介する。享保札については、すでに『和歌山縣誌 上巻』で、同じく『田辺町大帳』に基づき、若干の史料が共有知識となっている。が、享保一六年正月の通用規定をはじめとして、掲載部分には二、三カ所誤読と思われるところがあるので、重複をいとわず、改めてここに収載する——なお、前掲『和歌山市史 第五巻』の二〇五頁から二一〇頁をも参照せよ——。

享保十六年 (田辺町大帳十)

覚

和歌山町中来ル、二月朔日、金銀遣停止之筈ニ候間、諸色不残札にて取遣可仕候、右日限已後金銀遣候者於有之者双方とも可為曲事

一 錢遣之儀、老分九厘、上ハ一切取遣仕間敷候、夫以下ハ錢遣ニ可仕、

一 札売買之儀、銀百目致持參、札百枚、可請取之、札を銀ニ替候節ハ、札百貳匁致持參、銀百目可請取之、尤銀并札共ニ不依多少、右之歩合にて指引可仕事

一 御家中并寺社方町在共他国へ遣候銀子替候節ハ、札方吟味役所へ相断候上札場にて替可申事

一 札場之外にて札売買一切仕間敷候、但金銀兩替ハ兩替屋にて可仕事

一 他領より商ニ参候者ニハ、宿主問屋肝煎にて札売買滞無之様ニ可仕候、金銀にて取遣仕候儀ハ一切為致申間敷候、其日帰之商ニ参候者も可為

同断事

一 往来之旅人ハ金銀取遣不苦候、但一日ニても逗留仕候者宿主肝煎札買遣候、金銀取遣致させ申間敷事

一 借銀之儀、自今札にて借シかり可仕候、只今迄借来候分ハ札にて返済仕、札歩合百目付老匁添可遣之、但自今札にて借かり致候ニハ歩合有之間敷事

一 唯今迄金にて致借用有之分は、時之兩替相場ヲ以、銀札老歩入にて返済可致候、自今ハ金にて借シかり仕間敷事

一 損し札有之候ハ、札老枚ニ錢貳分添致持參、新札ニ替可申事

一 似せ札仕者於有之ハ、可為重科事

一 紛敷札持参候者有之候者、其者留置早速注進可仕事

享保十六年亥正月

一 御蔵へ返納之金銀ハ唯今迄之通、金銀にて納可



被申候

一御普請役銀只今迄候通、銀にて差出シ可被申候  
一京銀町借銀只今迄銀にて致借用有之分者、貳分  
入銀札にて納可被申候

以上

享保十六年亥正月

右の享保札通用規定が、田辺領独自の補足の「寛」を伴い、三月一日から田辺領内でも「金銀遣停止」と触れられるのは二月二五日のことである。

享保十六年亥(田辺町大帳十)

一二月廿五日被仰出候趣 当三月朔日

一田辺下町在共三月朔日、金銀遣停止候、筈ニ候間、諸色不殘札にて取遣可仕候、右日限以後金銀遣候者於有之者双方共可為曲事

二月廿五日

丁々申渡ス

寛

度田辺下町在共金銀遣停止 他国へ遣

候売物代金銀請取次第 替可申候、買物代ハ

銀札ヲ以正銀ニ 他国へ遣可申候、右売買物送状  
切并札場にて銀札ニ替候目録相添時々札方役所  
可差出候、尤他国銀子遣候節札場へ買戻シ参候  
ハ者は又役所へ相断可申支

付金子兩替直段之儀ニ付見合申度候ハ、其品

役所へ相達可申候

一他国之者参候ハ、逗留中銀札取遣為致可申候、何ニても売買仕候ハ、売物代にて銀札相渡正銀ニ為替可申候、買代ハ銀札にて買可申候、金銀相對ヲ以 用色物替等一切為仕申間敷事

売買物之儀色立代付ヲ致、売掛ケ 宿主

右代物直ニ受取候との品書付、問屋 宿主

取次時々役所へ可相届候、尤他国 参候

節、売物物書付取様之品 問屋宿主入念可申

聞候、問屋宿主無之 売買候分ハ他国之者

右書付取置 其所之売買主直ニ可相断候

一他国へ遣候売物代ヲ以直ニ買物仕場候義、商手廻シ之事ニ候間、其通ニ仕買仕切ヲ以、御領分カ正銀払之積リ役所江相達売買差引可仕事  
一諸問屋へ着岸候他国并御領分売買之舟荷物、陸を参候荷物運賃積共早速役所へ相屈指図□請可申事

一錢遣候儀参分九厘カ上ハ一切取遣不□□付、他国之者并小商人とも為□□在中所々ニ銀札ニて銭売買□□候間、其所ニて札買取遣可仕事  
一□□往來候旅人金銀取遣不苦候、右□人カ金銀受取候ハ、追而役所へ可申出候、一日ニても逗留仕候ハ、御触之通遣セ可申候  
右之外委細断様之品札役所吟味方へ承合候ハ、可致差図候間、其旨可相心得候、以上

享保十六年亥二月

来ル三月朔日カ田辺下町在共金銀遣別紙之通停止候筈ニ候、右停止ニ付諸事改方之儀別紙之通作略

有之筈ニ候、且又銀札売買場所之儀も□付候付、右同日カ売買為致申筈ニ候

□□趣田辺町在へも可被相通之候、以上

二月廿二日

□亥三月朔日カ金銀御停止被 □付候、則別紙御書付之趣堅相守候様ニ町江川共可申附者也

亥二月廿五日

二月廿六日川村清五郎石田茂右衛門若山上り

臣辺札御役所人数名前

頭役人 町手代

佐瀬佐介殿 平七

御目代 銀見

南条和田右衛門殿 次兵衛

本手代 札方

田中弥十郎殿 仁右衛門

吟味方 同

村田常八殿 次太夫

外ニ小遣老人

同

助市

拾老人

人々二月晦日到着大年寄役所へ見廻申候

前度被仰付候書付之外写し

□□船持荷主其外居住ハ御領分他国商仕者札方吟味役所へ□名前書候帳面尅状宛認印形□出置可申候、右帳面認候儀ハ□問屋之儀ハ入舟荷物色品書付見セ可申候、売払ニ而銀ニ引替候節、右荷物と代銀と相違無之様ニ相断可申候、同船持之儀ハ出船之積荷物右帳面ニ書記断見セ可申候、入舟候節右仕切早速吟味方へ見セ可申候、同荷主之儀ハ積荷物色品帳面ニ書記可申候、売払場候節仕切吟味方へ見セ可申候、同和歌山荷物之儀も吟味役所へ断切手申受可致持参筈、他国買掛リ之色品代銀付吟味役所へ断、右帳面ニ書記置代銀□セ申節、吟味役所へ断可申候

□□万端委細之儀ハ吟味役所へ□□承合ニ参指  
図受偽無之様ニ□□候

右之通丁々申渡ス

……(中略)……

一三月九日札役所々錢屋共へ以書付被仰付候写

し

在々錢屋定

一旅人宿リ有之所ニ每晚家々へ廻リ、□人数改帳面ニ付、右米代其外□物代之分改札買せ可申候

(一カ) □□駄参錢等見改札買せ可申候

(一カ) □□之旅人金銀ヲ以錢買度と申□□ニハ売渡可

申候、右金銀其所向寄□札場へ持参仕札買セ可申候、尤溜り錢無之節札場ニ有之銀ヲ請取売可申候

一在中之者小遣錢入用ニ札を以錢買申度と申者ニハ、貳匁迄ハ売可申候、錢之之外金銀ヲ以  
(衍字)  
札売買仕間敷候

一、小、商、仕、候、者、売、溜、リ、錢、有、之、筋、見、改、  
札、買、せ、可、申、候、

一、居、村、之、内、勿、論、  
外、村、ニ、テ、モ、老、奴、九、分、以、上、  
遣

ひ、又、ハ、内、々、ニ、テ、金、銀、ヲ、以、札、売、買、  
者、候、ハ、

双、方、名、書、仕、早、速、向、寄、  
所、ヘ、可、相、達、候、

之、通、相、心、得、可、被、申、候、  
以、上、

三月

十、日、札、役、所、ル、参、候、状、写、し、  
（カ）

此、度、別、紙、名、前、之、者、共、錢、屋、被、仰、付、候、  
夫、旅、人、泊、  
（カ）

人、數、毎、晚、廻、々、ニ、錢、屋、共、人、數、改、候、様、ニ、申、付、候、  
木

錢、買、物、代、金、銀、錢、共、翌、朝、札、場、ヘ、持、参、改、札、買、候、様、ニ

旅、人、宿、致、候、者、共、ヘ、入、念、今、日、中、御、申、渡、可、有、之、候、

以、上、

三月十一日

錢屋

北新町

万太夫

下長町

清二郎

本町

源七

江川

伝兵衛

札方吟味役所

大年寄三人宛

三月朔日、金銀遣停止ニ付、錢遣之、  
（カ）

分九厘、上ハ遣不申候筈候処、今以、  
多遣候

様ニ風聞致候、此以後右様之、  
（カ）

迄相心得間違無之様、  
（カ）

以、上、

三月十四日

札方吟味役所

……（中略）……

一、三、月、十、五、日、被、仰、渡、候、ハ、

覚

一、寺、社、参、錢、見、改、申、事、寺、社、方、ヘ、申、候、間、  
錢、屋、之、

者、共、明、十、六、日、  
無、慮、見、改、申、様、ニ、可、申、付、事、

□屋之者共見改可申間、商人共江□□渡事

□之品町江川へ可申付候、以上

亥三月十五日

……… (中略) ……

一十月 (享保十六亥年………注) 南部岩本屋利右

衛門似セ銀札致候付、和歌山ニテ搦捕致宰

者、此節迄罷在候処、十二月三日討首ニ被仰

付候由、同妻子親兄弟南部ニテ番人被仰付罷

在候処、当月廿七日 女房御領分追放被仰付

候、其外□□弟之儀者利右衛門親兄弟御赦免

利右衛門首十二月五日南部御□□□上ヶ知境

河端ニ獄門ニ掛ル 右首大庄屋鈴木熊右衛門  
和歌山ニテ請取夜通し帰候由

……… (中略) ……

右にかかげた史料はいずれも享保一六年のものである。

また左にかかげるのは享保一七年のものとなる。

一去亥三月ノ銀札遣ニ罷成上納銀札改包申様ニ

被仰付候、包銭之儀茶屋金百目ニ付拾四銭ニ

被為 仰付被下候、右茶屋包銭ハ古来る正判

銀之公銭ニ御座候得ハ私共公銭も正判銀包之

通御願可申上奉存候得共、御意重ク□□候

へハ早速可奉願候儀指扣罷□□論銀札遣ニ

御座候へハ正銀□□増可申奉存候処、包

高別而正銀□□儀無御座候故、包銭減少

仕候付、乍恐勝手相続難仕罷成奉願候、正銀

判包銭之通百目ニ付廿四銭ニ被為仰付被下候

ハ、御影ヲ以渡世取続可申御儀難有可奉存

候

右之通宜被仰上可被下候、以上

子三月

多屋六郎太夫

四人宛

右之通奉願候、以上

四人印

町御奉行所様

別紙口上書

一私共儀先年判屋被為仰付節委細ハ若山御屋敷

ニテ可被為仰付候間、罷上り□□□との御儀

ニ付参上仕御役所へ被召□□□□仰聞候へ長兵衛跡役其方へ被仰付候□□□茶屋方より可申付由申上候へ共、未□□□不被仰遣、就夫先、規、田辺新宮判屋へ御威光ヲ以茶屋支配にて無之格別ニ御立被成候処、新宮之儀へ近年茶屋支配ニ罷成候由ニ候へ共、田辺之儀へ何分ニも先規之通格別ニ御立被成度被思召候間、茶屋方へ罷越相談極可申由委細ニ被為仰付奉畏、則茶屋方にて論談仕候得共、数日埒明不申候付、茶屋元々申候へ御証文拜見被申候へハ事済申儀ニ有之由にて則拜見仕候処、初筆ニ口熊の田辺領茶屋承と御座候、依之私とも存念乍内証申聞候処、難捨奉存候哉、所々判屋とハ各別ニ埒明一札相極□□之御証文も出申候、茶屋判包□□付拾四錢所々判屋共包錢□□ニ付拾八錢と御座候御証文写し□□則御屋敷へ参上仕、茶屋方にて之始終申上候処、殊之外御嘗メ被為下、則御同見被為仰付、其上

御料理頂戴仕、為御褒美大年寄格ニ被為仰付被下外実以難有仕合ニ奉存候、右茶屋方相定之一札并包錢御証文写奉入御披見候処、所々判屋包錢ハ百目ニ付拾八錢ニ候得共、田辺之儀ハ御銀高無數ニ付先規より百目ニ付廿四錢ニ被仰付候、弥以先々之通可奉相守由被為仰付難有奉存御儀ニ御座候処ニ去戌九月より和歌山札遣ニ罷成候付、所々判屋共儀ハ先□□□居宅札役所ニ奉願、其身者□□役召抱之手代共迄札御役所御手代ニ□□□様ニ茶屋方へ願出申付、新宮□□私方へも内通仕候得とも、私共儀ハ右申上候通格別ニ御立被為成候判屋ニ御座候故、茶屋方へ願出申首尾ニ無御座罷在申候、且又正銀包之儀者小前より相交一日ニ拾貫目ハ老人にて仕候、御銀數見へ申節ハ貳人にて仕合、御役所御手支無御座様ニ相勤申候、銀札ハ一日ニ老人にて漸三貫目包申候、左様ニ御座候而ハ御手支ニ奉存三人にて仕候、

札数多見へ申節ハ四人にて相務申候、ケ様ニ御座候得ハ包錢茶屋金にて殊更銀札高無數御座候故、乍恐勝手取続兼申候ニ付、別紙願書指上申候、ケ様之儀者□□難申上奉存、別紙口上書ニ□□候、以上

多屋六郎太夫

子三月

..... (中略) .....

一 四月三日判屋六郎太夫判銀札包錢之願被仰出候趣

覚

□銀札百目 包錢貳錢上リ

拾六錢ニ被仰付候、申渡ス

..... (中略) .....

□□七日 (享保十七年六月.....注) 夜以書付

被仰付候趣

□度<sup>(此カ)</sup>壹分之銀札出来ル十八日、通用之筈ニ

候、町在札場にて是迄正銀札銀売買ニ極リ之

歩相ヲ以取遣ひ可仕候

但当分ハ先只今迄通用之札ヲ以札場にて壹分札引替之儀ハ勝手次第ニ候

..... (中略) .....

□□<sup>(二カハ六カ)月カ</sup>

□十六日 (享保十七年八月.....注) 暮

方被仰渡候ハ

町江川穀類ニ不限万色売買仕不申候由御聞達ニ付、銀札停止之品有之候得ハ和歌山御屋敷より早速御通達有之筈候処、左様之品も無之内ハ直段高下ハ格別、売買仕候様ニ会所にて町々年寄申渡ス

右之意趣ハ銀札之儀ニ付、町江川殊之外騒

動諸色一切売買無之人々周章申候付、右之

通被仰付候

..... (中略) .....

一 酒上中下直段諸色高直ニ付会合にて申達、今日、四分上ケニ被仰付候 則申渡ス

八月十六日

口上

一此度米穀殊之外、高直ニ罷成、諸色売買騒動仕申候付、此段御尋ニ御座候、右売買殊之外、直段引上ケ申儀ハ、上方ノ段々銀札持参候、商人□□諸色買申度由急ニ申参候得共、□□売人無御座候故、直ニ下浦へ□□屋売候麦等□□和歌山□□之麦等□□買物格別高直□□吟味仕候得共、□□替□儀相知レ不申候

右之通御座候、以上

子八月十六日

丁々年寄中

江川庄や年寄中

右之趣中買共へも御尋ニ付一通認上ル

………(中略)………

一八月十二日(享保十七年………注)米相場新米八十五匁段々買上ケ、十七日ニハ貳百五拾目之売買、尤中買相場貳百拾匁位、十七日夜より百五拾目段々引下ケ十九日百拾匁位

(八カ)月カ  
一□□十九日夜被仰付候ハ

□□問屋□□札役所へ申込候七月分

□□目町御奉行所

□□預リ麦掲麦

□□貳拾六石御買せ

□□て一同ニ五石余ツ

□□吉兵衛五兵衛方にて御売せ

□□成候銀札老匁ニ貳升三合ツ、小升廿日ノ廿四日之日数ニ売候

一八月廿日以書付被仰渡候趣

一此度銀札遣候儀ニ付、無益之儀申触し騒動仕候段、何方ノ承出し騒動仕候哉

一諸色夥數買込直段高直仕候義何者仕出候哉

右之趣急度吟味申付候

八月

(左の史料については『和歌山縣誌上巻』八四五頁と八四六頁を参照せよ)

□□書付之意趣ハ先日吟味書於若山

□□様御上覽被遊殊之外御叱之御意にて



書為致候様にと

無益之儀申敷

段何方へ承出し騒敷仕候哉

吟味ニ御座候、此方諸色売買高直ニ御座候義ハ、当十二日の上筋商人入込、御当地にて何等之物ニ不限買請申度由にて、或ハ夜ニ入罷

越直ニ買物等聞立申者共多御座候故、夜通し

(この間は原本の丁付は一丁とんではいるが、意味から考えて丁付の間違いと判断する。藤田注)

罷越候様ニ相見へ不審ニ存、御当地商人共諸

色売不申、兎角買物無御座候付直ニ下浦へ返

リ申候、依之上筋相場高直之様子何も承<sup>(カ)</sup>哉、

見世々々米麦小売買人数多参

間ニ切申ニ付、売続申度

先達而申上候通

高直<sup>(カ)</sup>ニ罷成候

相<sup>(カ)</sup>高直ニ被

際目ニ御座候へハ

一切無御座所持之米麦無数

儀仕候折柄、質屋共へ質請之者とも質屋数

々在町大勢入込前後争ひ兎角早々請申度由

申候付、質屋共如何様之品とも不弁候得とも

夫々へ相渡し申候

一諸色夥敷買込直段高直ニ仕候義ハ、何者仕出

し候哉と御吟味ニ御座候

右申上候通諸色相場高直ニ御座候付、町在共

何ニ不依売ニ出少々相求申候代物にて質物

受申由ニ御座候、別而

買者無御座候

相止候哉と御

売相止候儀ハ

宜頃日騒敷

申候同夜町

前急度被仰付、翌十三日商売仕

候

右之趣急度吟味仕候様にと被仰付、町内一々

吟味仕候処何者頭取候と申候儀も無御座一統  
ニ騒たち儀ニ御座候、右申上候通偽無御座  
候、以上

子八月

丁年寄

中

江川庄や年寄

宛名なし

大庄屋  
大年寄 印

一諸職人賃銀唯今迄ニ三分上リ被仰付候

八月廿二日

..... (中略) .....

口上

一此度質屋共質物月切之儀御尋ニ御座候、近年  
世上不作相續き、売掛取替等曾而寄不申候、  
只、今、銀札、不、手廻、ニ御座候付、直段下直ニなら  
てハ得借し不申段申候へハ、五ヶ月□ヶ月之  
内ニ請可申候間多借くれ候へと□ニ付相對ニ  
て月切仕候

儀□仕段御尋ニ御座候

申ニテハ無御座

敷参尤

多候者

諸色持参

遣申候、其節□物相場

殊之外高直故、只今ニテ損銀御座候付、得売

弘不申銀札不手廻ニ御座候而、当分賃得取不

申候、尤置替等ハ致遣シ申候、銀札手廻リ申

候ハ、先々之通商売可仕奉存候

右之通宣被仰上可被下候、以上

子(享保十七年...注)九月

本町 市兵衛

袋町

長太郎

北新町

五左衛門

上長町

専之丞

同

弁右衛門

同

与次兵衛

亀太郎

与左衛門

11

加左衛門

市

享保札は、享保一五年九月、紀州茶屋を札元に壹匁札が発行されているが、享保一七年六月には壹分札も発行された。享保札は、米価をはじめとする諸商品価

格の騰貴による、いわゆる銀札騒動が原因となつて、享保一八年六月一〇日に銀札の通用を停止し、八月にかけて銀札百匁につき、正銀三十匁で引き換えたとき、る。が、銀札停止の噂あるいはこれにまつわる騒動がましきことは、田辺では、すでに享保一七年八月中旬に起きているようである。享保の飢饉が、享保一七年のいなごの害を主因として伊勢、近江以西の西国一帯に起つた飢饉であることを考慮すると、いわゆる銀札騒動の一因に、享保の飢饉による庶民生活の困窮という筋道があつたと判断できるようであるが、藩札発行主体である藩当局が米価騰貴をねらつて行なつた銀札発行が触媒として大きく働いたと推定できる節がここに収録した史料にはある。たとえば、「売買殊之外直段引上ケ申儀へ、上方々段々銀札持参候商人□□諸色買申度由急ニ申参候」とか、「此方諸色売買高直ニ御座候義ハ当十二日ノ上筋商人入込、御当地ニて何等之物ニ不限買請申度由にて、或ハ夜ニ入罷越直ニ買物等聞立申者共多御座候故、夜通し罷越候様ニ相見へ不審

ニ存、御当地商人共諸色売不申」とするところに注目したい。

次に、享保十八年の史料を収録する。

享保十八年(田辺町大帳十一)

一同(二月……注) 四日朝米壹石ニ付三百卅目、

同日幕方三百六拾目

一二月五日札役所<sup>を</sup>書状参候

当時町在米糶穀払ニ付小売指支候由、就夫此節

他国<sup>を</sup>入津之米穀正金銀ニて売買勝手次第致さ

セ候筈、且又干鰯之鱈も右同様ニ為致候様ニと

御年寄衆被仰渡旨、森吉助殿<sup>を</sup>御通ニ而候、右

之段支配方へ御通し可有之候、以上

札方吟味役所

二月五日

四人宛

(總)

在々<sup>總</sup>練屋嶋屋共練替綿御領分中買せ申答候間、

練屋共<sup>る</sup>上方へ□上セ候練代銀ニて他国綿買遣

儀指留ル筈ニ候へ共、前々之通上方ニて綿買セ

申答ニ候間、御支配下へ右之段御通し可有之候、  
以上

二月五日

四人宛

………(中略)………

一六月九日夜通し銀札騒動、正銀<sup>(壹力)</sup>□匁ニ銀札八匁

を段々拾貳三匁まで、同十日朝米壹石壹貫六百

目と申候得共指而売買も不承候、尤正<sup>(銀匁)</sup>□ニてハ

七拾貳匁位之相場ニ御座候

こうして、享保十八年六月十日、享保札の通用停止

が、奉行から触れられた。

#### 四、文政の松坂札

紀州藩は、文政五年(一八二二)にいたって、三た

び藩札発行に踏み切り、以後十年満期の銀札通用年期

の継続延長を四回にわたって幕府に申請、これを許さ

れ、さらに、慶応二年（一八六六）には摂河泉和播五カ国通用札の発行も認められて廃藩置県時にいたる。

文政の松坂札に關する本節の史料は、以下いずれも三井文庫所蔵の越後屋三井家のものである。

三井家は文政六年に、松坂御為替方に續いて松坂札の札元になるが、それに先立つ寛政三年（一七九二）、紀州藩の米切手の引受けをめぐって興味ある史料を残している。「寛政三亥年二月若山切手方一件之扣」（別一六八六の七……三井文庫の史料整理番号、以下同様）が、それであるが、当面必要と思われる部分を左に紹介しておく。

口上ニ而断申候覚

一御勝手御取直ニ付今般御拝借米五万石之内正米三萬石若山御蔵へ御詰、残り貳萬石銀ニメ大坂米屋平右衛門手前（三井家のこと……注）へ両家へ御渡被遊、右銀米高丈ケ御切手を以於、若山御取引被遊候御仕法、則別紙御書付之通ニ御座候得者、諸共ニ出情相勤可申旨畢竟御立用可

申義ニ無之、御預高切手差出し候義、違背者有之間敷候へ共、尚又存入差支等有之候へ、無遠慮可申上之旨被仰渡奉承知候、同苗共并手代とも□<sup>（ムシ）</sup>聞候所、外ならず御國之義相働候義勿論ニ候へ共、右之内差支可申義左ニ奉申上候

一私方米平家業と違、御大名借其外米切手等取引致付不申、其上同苗一統店々類焼後飯屋又者借屋住ひニ而、家業を始萬事不操合而已ニ而、世上ニ而目を付罷有家業取引致悪キ折柄、此度御趣向之御切手名前を差出し候而者山師之如申成、彌家業ニ障リ可申難渋奉存候一於若山見セ差出し手代差下置候義甚難渋奉存候、曰者呉服商ニ而も近國へ持出し手代差遣し商致候へ、夫丈ケ賣高出来可申候へ共、其手代引負出来申候故勘定合かく御座候、依之前々る江戸大坂之外出商不仕、又私共ハ店引請罷有候得者中々御國へ參相働候義難出来候、御武家方者御役御免被遊候而も御扶持

頂戴毎々迄も御家来御座候、町家之義者相勤候内者主從ニ而、仕落致暇遣候而者何ニ而も無御座候故、手放候而此度被仰聞候通御國へ差遣石銀高取引為致候義中々難出来仍而此義ハ一向御断申上候

一米取引之義若山御藏へ御詰置、私方預切手差出し候義難決奉存候、尤、出し入立會可申との義ニ候へ共、別而米之義不案内之義候へ者、此義も御断申上度御座候

一於若山此度御仕法者御建被遊儀ニ候へ共、右切手京大坂へ追々相廻リ可申、然ルニ私方三ヶ津店差出有之、御公儀之御支配請罷有候所右躰名前を記候切手取遣イ仕候而者

御公儀御察度惡候義御座候、此義も乍序申上候、御賢慮被遊可被下候

右之通御座候、然者此度之御取直し御趣向被遊候所相背、不働ニ可被思召上恐入候得共、存入申上候様被仰付候義、此度奉申上候、可相成

義御座候ハ、切手名前御用捨被成可被下候、尤、米平手前格別ニ被思召被仰付候段者難有奉存候へ共、米平儀者米切手其外取引致付候義、私方ハ萬事不案内御座候、此度米平方へ不殘被仰付候とも御恨存不申候、ケ様ニ申上候ハ、御用を溜拔ケ候様可被思召上、全左様ニ者無御座候、乃至大坂へ之振手形米平京都へ御振手形者手前ニ而相勤可申との義ニ候ハ、御銀預候丈ケ者相勤可申相談も可仕哉、尤、京都御用聊ニ御座候而御銀當分ニ預申度義ニ而者無御座、御用之所御賢慮次第多少御預可被下候

右之通御断申上候所、先々御承知被下、乍併此度仕法三井米平両家名前を遣ひ候が御趣向候得者、夫を背キ候而者難成、併得心無之を押付候茂 御上思召ニ難叶、引取、又々及相談跡ハ懸合可申候段被仰、御歸國有之候

一二日出之御状致拜見候、此節少々御不快之由、随分御保養專一可被成候、然者申進候趣委細承

知被成、尚又切手貫目以上之事と御心得候所壹  
 匁札ニ而左候而者人手も多く懸リ御難渋之趣御  
 尤致承知候、然レ共右切手壹匁計ニ而も無之、  
 拾匁百目も有之、さのミ札數ニも相成申間敷候、  
 人手懸リ候處者察入候へ共、此所者米屋と同様  
 ニ而、分ケ而御頼申候所ニ御座候、仕方書之  
 事追而差進可申候、別之事ニ而茂無之正銀不相  
 渡内者右切手印形不成様、其外追而御難渋之談  
 等無之、為證文差進候迄ニ候、委細者先日畢竟  
 書ニ有之通ニ付、分ケ而不申進候、人手懸リ候  
 迄之事ニ候ハ、此義者乍御世話宜様御談可被  
 下候、多く者若山ニ而引替候故、大坂表江者纔  
 ニならでハ相廻リ申間敷候、敢早外ニ差支も無  
 之御仕方之基ニ付乍御不勝御承知可被下候、兵  
 左衛門殿ニ茂發足前安心被致候様、拙者義明日  
 若山へ立歸リニ致發足候間、此御報并此間差進  
 候切手本紙共若山江向早々御越可被下候、頼入  
 存候、恐惶謹言

三月四日

田中八藏

上嶋七郎兵衛様

……(中略)……

一貴札拝見仕候、如仰春暖相催候所、弥御安全可  
 被成御座珍重之御儀奉存候、然者田中八藏様此  
 間御出坂、御振手形之義私方へも被仰談御座  
 候、右御振合ニ付、貴家様へ茂被仰談、御同  
 様御勤被成候様被仰聞候所、御賢慮相分不申義  
 御座候ニ付、御仕方御尋被仰上候所、正銀渡無  
 御座内者御振手形ニ御印形被成間敷義被仰聞、  
 追而御難渋被御談等無之趣御證文被下候と之御  
 事ニ而、委細者先達而御上京之節被仰聞候通り  
 ニ付、訳而不被仰聞趣ニ而、委敷御答無御座候  
 ニ付、猶亦御窺被成候所、昨日御歸國之旨往返  
 隙取申候ニ付御内々御尋被下候者、右御振手形  
 御談合且私方仕法申上候様被仰聞、承知仕候、  
 此義左ニ

一右御振手形筋貴家様御承知御座候者、銀札ニ

而者御承知茂無御座、御振手形ニ而御取扱被成候ハ、御承引も御座候趣ニ付私方へ茂被御談御座候所元来私方も望不申候事ニ御座候得共、貴家様ニも私方承知仕候得者如何ニも御相談可被成趣ニ付、無據御申談仕候仕法者

一御儀定御證文頂戴仕、右御儀定御證文之御下書被下候ハ、右ニ望ヲ申立可仕、勿論銀高相極右高丈取計可仕、右御振手形ニ印形之義者兩替ニ有之候振手形目印仕候文之銀高相極、正銀御渡無御座内右目印も不仕、猶又重キ御印頂戴仕、年數三ケ年に相極相勤、其上又々御頼被下候得者、三ケ年相勤可申候、夫迄御約束違候ハ、御斷可申上趣之御儀定ニ而御證文被下置候様申上候御儀御座候、其外愚意茂御座候得共、是者全此方之心得ニ而御約束ニ抱リ候事ニ而者無御座候、右之趣御座候間、宜敷御承知可被下候、猶思召も御座候ハ、無御遠慮被仰聞可被下候、扱亦私義も四五日之内遠方へ罷越申候、若御引

合之義も御座候ハ、同役八郎兵衛と申者御座候、此者へ御引合可被下候、何分御儀定御證文拝見不仕内者治定不仕義ニ御座候、御趣意者承知仕罷有候御儀御座候、先者右貴報申上度如斯御座候、恐惶謹言

三月六日

米屋

越後屋七郎兵衛様

六郎兵衛

ついで、文政六年五月、三井家は遂に、松坂御為替組(長谷川源右衛門、小津清左衛門、殿村佐五郎、長井嘉左衛門、坂田五郎兵衛)と並んで、松坂札の札元となる。藩当局は三井八郎右衛門へ申付け、三井同苗の宗十郎と則右衛門の兩人が引き受け、この業務に当たることとなった。「松坂御銀札一件」(統一四五三/八)に、その時の請書がある。

御請書

一勢州御領分町在々共今般御銀札御通用、右者松坂表御為替方へ被仰付、則同所於会所御引替所



相立候処、町在々婦服仕候御趣、右ニ付私共名前を以御為替方同様三井組与相唱、一株相立、尤万端御為替方申合差支不申様取扱可仕旨被仰付奉畏候、併右御銀札之儀者は迄手掛リ不仕御用捨之段奉願度候得とも、御領地御融通無御抛趣之仰談御尤之御儀ニ付、右御用之御儀御請奉申上候、万端宜御差圖被成下候様仕度奉願上候、以上

五月十三日

三井八郎右衛門

御組頭中宛

なお、文政の松坂札は勢州三領では、文政六年四月一日から、専用的通用とされたようである。左の定書が、史料(一四五三/八)の中に残っている。

定書

一 勢州三領町在共當末四月朔日銀札通用致し

管候事

一 銀札賣買ニ参候もの請書差支不申様早速將明

可申事

一 札兩替之儀金壹兩ニ付札六拾四匁之割を以可相渡、本札を以金ニ引替候節も札六拾四匁請取金壹兩相渡可申事

一 水江入候札、焼疵之札者引替申間敷事

一 三領在々諸納筋銀札持参之分、勿論納リニ相

立可申事

一 江戸若山御用米運賃之外諸拂銀札ニ而可相渡

事

一 紛敷札持参之もの之候へ、其もの留置、

町奉行所江注進可致事

文政六癸未四月朔日

右者金澤彌右衛門様并稲葉三蔵様大坂表へ御返

御奉行役御組頭役

留中、林三七浅井分右衛門出坂御掛ヶ合之御御

渡被下候御書面ニ而有之候

次に、文政の松坂札を主題とするなかに、紀州藩藩札史全般に関する重要な事実を、今に伝えて呉れる史料が次のものである。これは年次不詳のものであるが、戌ということ、史料の内容から文政九年(一八

二六) のものと推定できる。三井文庫の整理番号は  
(一四九六/三四) である。

一筆致啓上候

一紀、国様、勢地御領分御銀札之儀ニ付、御国許組頭様々 八郎右衛門様江御状御到来、則写取持下申候、御入手御覽可被成候、尤、右銀札之儀ニ付、去ル未秋万一御地江相廻リ御調物代々御渡被下候節ハ此方様御名前之羽書計ハ無様義故、彼地通用金老同ニ付六拾四匁之割を以御請取、外名前羽書亦者銀子引替等之儀者決而御断被申上候様及御通達御承知之儀、尤其節者勢地計之儀、且者遠國方格別之員數茂有之間敷哉ニ存候処、其後追々手廣ニ相成如ク、此度之大和地江も致通用、隣國旁大數ニも相成可申、然ル時者猶亦可被極御勘弁思召ニ御座候、元来右銀札御名前羽書等世評も如何御心痛被遊候儀勿論先年も右御企有之、元禄十五年、宝永四年迄六ヶ年之間限ニ而二歩扱ニ而通用相止ミ、享保之度

ハ、三ヶ年、間、通、用、イ、歩、之、御、扱、ニ、而、止、メ、ニ、相、成、併、其、節、ハ、御、引、替、會、所、ニ、而、御、取、計、之、儀、故、一、統、乍、迷、惑、事、相、濟、申、候、此、度、者、訳、合、違、御、名、前、等、出、シ、有、之、其、上、引、当、物、等、も、無、之、儀、先、者、空、札、与、申、物、ニ、御、座、候、当、時、御、国、許、之、御、振、合、兼、而、御、承、知、之、通、方、々、様、多、中、々、六、ヶ、數、詩、節、旁、以、大、難、洪、物、ニ、御、座、候、間、隨、分、事、輕、ク、相、濟、候、様、且、者、手、馴、不、申、賣、人、杯、害、入、等、之、算、当、紛、敷、依、而、差、支、之、筋、御、申、立、程、克、御、断、御、申、上、被、遊、度、思、召、ニ、御、座、候、然、れ、共、当、地、限、ニ、而、者、御、国、思、召、も、如、何、ニ、候、条、一、応、通、達、之、上、御、地、者、土、地、違、之、儀、且、者、店、状、方、何、成、共、業、終、ニ、差、支、之、筋、御、申、立、迷、惑、難、決、之、趣、御、返、書、別、段、ニ、御、認、登、リ、可、被、成、候、右、を、以、猶、亦、御、勘、弁、之、上、御、国、表、へ、御、返、書、御、差、上、可、被、遊、御、積、其、上、御、聞、濟、無、御、座、候、ハ、致、方、も、無、之、何、れ、難、決、差、支、等、之、訳、合、申、上、置、度、思、召、ニ、御、座、候、間、此、旨、御、承、知、猶、亦、御、存、入、も、御、座、候、ハ、可、被、仰、聞、候

………(中略)………

若山御組頭衆る御状之写

然者松坂表銀札之義先達而申進候通、南都其外  
大和辺ニ而も都合能致融通候事ニ候、夫に付三  
井組羽書大坂表御店ニ而調物代等ニ聊ツ、差出  
候義茂可有之、其節無滞差引有之候ハ、弥氣  
請も可宜相聞候間、此上右羽書御店へ差出候も  
の有之候得者、無差支請取候様致度候、尤右銀  
札南都表御店へ被遣、同所ニ而引替方申付有之  
候、墨屋喜七方ニ而銀子ト引替候様致度、又者此  
表江差越候ハ、米屋店為替手形ニ而銀子ニ引  
替可申候、右之趣大坂御店へ御心得させ候様致  
度御頼申入候、仍而如此候、恐々謹言

二月十六日

井口喜八郎

三井八郎右衛門殿

岡本勘右衛門

追啓

本文之通ニ候得者銀札ハ南都へ引受させ有之儀  
ニ付、可相成ハ彼地へ被遣候様、墨屋喜七店へ

被遣候へハ、早速銀ニ成候事ニ候、尤銀百貫目  
ニ、銀札百貳貫目相渡遣し有之候間、右之割合を  
以御店調物代ニ請取候節ハ、銀札老久を銀九<sup>マ</sup>匁  
八厘ニ勘定差引致候へハ、宜事ニ候、此段御心  
得迄申進候、已上

勘右衛門

喜八郎

二月十六日

八郎右衛門殿

戊三月南江戸下向之節、松坂御立寄ニ付、此  
書御持下り於彼地委細御演舌有之筈

松坂銀札一件追々及駈合候得共、爰通年者元来  
京都にて御請被申上置、執扱者諸事松坂へ被振  
向、其上簡為申登候得者、京都ハ不案内と申  
所ニ而、松坂存念通りニも不相成、執計方甚迷  
惑との義至極尤ニ存候、右者去ル未三月於松坂  
始而被仰聞、其段心得為申登置、四月金沢様稱  
葉御氏御帰府之砌大坂御滞留中同七日与七文右  
衛門出坂いたし一通御断申上度旨入訳申述、其

後文右衛門若山へ罷出、尚又銀札ニ名前誌候義者強而御断申上候得共、無余儀誤合ニ相成、五月十三日附を以御請書被差出候付、同月廿四日於松坂被仰付、仍之同廿六日井田市兵衛為致出京、右節不容易御用筋然ニ当春於若山一統江被仰渡候執締方一件、其後何等不被仰聞、江戸大坂重役共于今在京仕罷在候得共落着之模様も相見不申、假今御用筋ハ無障候而も家業違之儀旁一統取締出来候迄暫く御延引被成下候様内存申上見候得共、(不聞)又当店ニ而ハ全く餘業勿論元方掛ニ可相成候得共、全牀執締方出来不申候而も店々本業ニ差障不申御思慮候ハ、其旨委鋪被仰聞被下候様、巨細者銀札方状控ニ有之通ニ候、且市兵衛へ申含為差登候所、尚紙上ニ而ハ難整候間、早々出京いたし候様との義ニ而、市兵衛ハ被差戻、同人六月四日致帰坂候、然ニ同六日元方懸リ重役共退身願差下候付、猶宗十郎ハ油小路江書面を以、当春於若山執締方專一ニ

被仰渡候處、今日ニ至リ其貌相見へ不申候、右者如何被仰立候思召ニ候哉と委細申達候得とも何等御返答も無之、夫ハ引請終ニ八月若山へ一統罷出候及始末候事ニ候得共、前条御請書被差出候義被及御勘弁候品とも相見へ不申、尤此御用而已ニも不限、其外いつれとも難相分等閑ニ相成候節彼是有之候得共、御用之儀ハ今更申立方も無之可相勤者勿論ニ候得共、竝初より申達し候通他向出會勤ハ不好義故、其表店限りニ勤候筈ニ而執扱場所等為申登候繪図回通店取繕も為致、追而元方ハ提書をも可相渡管申達置候得共、銀札會所出来、兩組一手ニ不成候而ハ勝手不宜との旨ニ付、又方組會執計方之儀者元方差図ニも不相成故、其表執扱筋作略之儀者於元方構ひ不申筈、未十一月令通達候、然者未致全備事ニ候得共、先ツ三ヶ年之間者其促ニいたし置候積申九月申入候通之事ニ候、乍来深く勤考有之度ハ前以被仰出候事共、兎角終リ有事少くミ

へ候得者、未ニ無寛東存候

一松坂銀札元禄十五年通用被仰付候處、寶永四年從公儀被仰出之品有之相止、尤三歩通引替、其後享保十六年四月又々被仰付、松坂正米間屋ニ而執捌候處、同十八年六月相止、此時者老歩通りならては引替リ不申、銀札方役所預リ一札ニ相成候得共、取扱元役所有之候、此度ハ貸附高まで都而兩組執計ニ候得者、弥以心配之事ニ存候、又寛政三年御取替米五万石捌方之儀ニ付手前并大坂殿村平右衛門兩入江通用切手被仰聞、則如左

表

御勝手	銀老兩預	御勝手
右此切手を以引替可相渡候		
三井八郎右衛門殿		
殿村平右衛門殿		

裏

殿村	三井
御勝手	

表

米何俵預
右此切手を以何時ニ而も相渡可申候

裏

三井八郎右衛門
殿村平右衛門

右銀札ニ似寄候御趣法ニ付、押而御断申上候故何等無故障候、然ニ同七年右御取替米御年限ニ付高木兵大夫様江戸表へ御越御返納御年延被仰立候思召之處、村岡八藏様御了簡ニ而御返納被成候、然者五万石御年限中御繰合ニ相成候得共、既其節御立用金被仰出、且村岡様松坂ニも御越御立用を以御返納相整候、其後手前方勢地

同様月割上納金被 仰付、相納候處、文化元子  
 年三十年賦ニ相成、六ヶ年御下り、残り差引三  
 万千四拾兩全て永上御證文ニ引替候、又御勝手  
 御用出精相勤候付文化六巳年より御米四拾石宛  
 六ヶ年之間被下候得共、是以戌年後ハ不被下候  
 ニ付、昨年出府之節申立見候得共、此節御執被難  
 被成由ニ候、此餘先年大坂ニ而差上候御立用金  
 年賦、殘四拾八貫目余昨年春永上被仰付、又鈴木  
 五兵衛兩替店取組元銀四百拾貫目余、去ル文化  
 五年同人證文沽券とも若山ニ差上年々銀貳貫目  
 宛御渡被下候筈候所、五兵衛方難渋之品有之由  
 ニ而一昨年より半賦ニ相成、又同年御仕入方講  
 銀被 仰付、右之通過分之御奉公相勤罷在候得  
 共其功無之、尤若山出府之節ハ結構御執被成  
 下候得共、また費用も多く相成候故、昨年ノ音  
 信等致減少尚追々以前之勤方ニ建直し候積、就  
 而ハ元方振出し物都而省略いたし候様、是又相  
 改候筈、然共右ハ内證損亡ニ而金銀出方差支不

申時節候ハ、差而本業妨ニも相成中間鋪道理  
 ニ候得共、銀札之饑ハ他國迄名前出候事故、萬一  
 故障有之候而ハ世評ニ懸リ自然商支障ニも相成  
 可申、殊更南紀當時御振合先規より無之御勝手  
 之外、西濱様御廣鋪御貸附并甘庶方此外御國產  
 物御賣捌御下屋鋪御廣鋪方ニハ冥加上御執扱御  
 表ニ不拘、格式御扶持等被下、三御殿各ニ御執計  
 之御時節候得者、御仕入方銀札不ハ弥手廣相成  
 可申哉、手前万端取縮候折柄不相應之御用、其上  
 勢地限ニも無之他國迄通用之義於其表店如才有  
 之間鋪候得共、去冬江戸大坂ニ而銀札兩組共引  
 替候様申越候所、此方名前之札ハ無余儀代呂物  
 代ニ受取候筈、御為替方之札ハ断申候旨及通達  
 候事、右者双方組合通用元名前之店まで受取不  
 申而ハ如何ニも相聞可申候得共、江戸兩替店包  
 於当地兩替店引替不申、是ハ実ニ不当之様ニも  
 候得共、以前ノ仕来相濟有之候、其餘店々商事  
 定之外其店限之進退作法之中若行莊不宜とて馴  
 (形相)

来候義者改かたく畢竟仕来を見寛萬事以前之建を以業躰調候事、しかし御用筋ハ右等引格ニハ不相成候得共、此度之銀札勢州を限り候歟、又於元方ハ執扱差別相立家則ニ混し可申様無之候へ共、店々大勢之者少しニ而も新規之儀ハ行届不申、自然仕来乱落いたし候而ハ不相成、可成者江戸大坂ニ而銀札受取候義者不好候、其故ハ若銀札持参有之方ハ何れも御買人ニ候得者會所勘定場杯と違ひ、賣場之儀ハ聊にても餘事ニ心を用ひ候而者不宜、然共今時格段差支と申にても無之義を申立候而者、松坂店迷惑ニ存執扱方無之様可存哉、左様にてハ無之御用之儀ハ勝手惡候迎致方無之候得共、銀札執扱ニ付前条之趣意差含店々商支に障り申ましく哉ト先相考候様心得させ置申度、三都松坂とも一躰之事ニ候へハ其店限骨折損と申にてハ無之候、去年六月銀札方勘定調帳江附紙を以申達候通於京地ニハ仕法難相分、且元方ハ勿論其外とも改正之折

柄万事厳格ニ相建可申品ニ付而ハ、銀札一件者餘業之事故、懸合方松坂存念とハ齟齬可致義も可有之候得共、本業整不申候而ハ御用も相勤不申候間、前段之義共深く相勘執計候様兼而心得させ置候様いたし度、仍而件之趣申達候

戊三月

右の史料から、元禄札・享保札が勢州領でも通用せしめられていたこと、『和歌山縣誌上巻』の延宝六年発行説は、該書が典拠にする『古今財用論』以外には確認できない、どちらかというところ説であろうということが、理解できる。さらに、三井家はしきることなしに紀州藩の藩札のみに限ってその札元になることを決定したようである。

文政の松坂札が、すでにこの時点で、大和でも通用していたことは、後の五カ国通用札の前史として見落せない。それを可能としたのはひとつは三井家の信用にあったことは疑い得ない。藩の組頭が「三井組羽書大坂表御店ニ而調物代等ニ聊ツ、差出候儀茂可有之、

其節無滯差引有之候へ、弥氣請も可宜相聞候間、此上右羽書御店へ差出候もの有之候得者、無差支請取候様致度候」と、いつていることに注目したい。これに對して、三井家の方とはいえば、文政の松坂札は「名前等出シ有之、其上引当物等も無之儀先者空札与申者ニ御座候」と内心不安をかくせないでいる。

## 五、むすび

以上、紀州藩藩札史料拾遺と題して、『田辺町大帳』と三井文庫の史料から、紀州藩の元禄札・享保札・文政の松坂札の史料を紹介した。当初にことわっているように、現在の私には藩札研究史に理論の面では参加する能力も用意も全くない。ただあるのは、紀州藩というひとつの大名領国——藩国家の長期間にわたる藩札発行事情を伝える史料を、とにもかくにも整理しておきたいという願いだけである。それにしても、気が付くことは、藩札史研究においては、従来の作道、川

上論争の分析視角に加えて、新保論文にもあるように藩札発行主体である藩国家の経済構造の変質過程とかかわらせた上で、藩札の性格規定をする必要である。

少なくとも紀州藩については、元禄札は、元禄期に高まる農民的商品流通の展開を背景にした錢貨の需要、享保札は米納年貢に立つ藩権力にとつての米価持直しの目論見、文政期の松坂札は寛政期に顕著化しはじめる藩財政の窮乏の補填策、といったものを、その発行事情の背景として有していたと思われる。

なお、三井家は明治新政府の成立後、和歌山藩に對して、その銀札から三井の名前を削ってほしいと願っているのだ、それに対する和歌山藩の文書を最後に紹介しておく。この史料も三井文庫のもの（続二三八〇、一ノ四）である。

### 相渡証之事

一文政六末年を為致発行候勢州領分銀札并天保八酉年を發行紀芻若山銀札之内其方共名前相願シ候分在之候得共、從來兩地共都而當藩關係ニ



而、勢地取扱丈ヶ之義者為替組并其方共へ申  
付置候迄、然ルニ御一新以来八郎右衛門義者天  
朝御用廉々相勤居候儀ニ付、今般大藏省の御沙  
汰之邊茂在之、銀札除名之義申立候得共、何分  
一時ニ者難行届候間、連々可及所置、尤自然向  
後御沙汰之次第ニ寄、當藩の委細申立其方共為  
致迷惑問敷、為其一札如件

若山御藩

明治三年八月

御役御連印

三井八郎右衛門

三井則右衛門 江

三井宗十郎

(附記)

本稿で使用した『田辺町大帳』は、和歌山企画部県史編  
さん室が撮影した写真版である。また、三井文庫の史料  
は、そのリコピー版である。いずれも膨大な原文書よりの  
取捨選択作業が必要であった。この作業は和歌山県史編さ  
ん委員会の近世史部会のメンバーが行なった。筆者もその  
メンバーのひとりではあるのだが、同会所属の諸先生方の

御努力がなければ、今日かような形での史料紹介をするこ  
となど考えられるものではない。諸先生の御厚意に深く感  
謝するものである。なおまた三井文庫、和歌山県文化振興  
課県史編さん班ならびに岡嶋神社・田辺市立図書館にも心  
より謝意を表したい。

(一九八四年九月二十四日)